

装ひをしてゐる處であり、立てる婦人はその召使であると言ふ。

次の繪は衣裳豊かに寢臺の上に腰をかけてゐる中年の婦人が今迄の儀式の光景を見てゐる處である。これは尼僧の長である。頭からヴェールが懸つて居り左手の紅差指には指輪をはめてゐる。

これ等の多くの婦人の頭髮は金髪に非らざれば薄茶色であり、眼は何れも全く褐色である。寢室にはデオニソスの神に關する光景を描いたらしい壁畫がある。酔へるデオニソスがシレナスに支へられてゐる場面、プリアバス (Priapus) の神の祭壇に犠牲に供ふべき豚をキュピッドが引ける光景、松明を持てるものがキュピッドの道案内をして祭壇へ急げる光景、王冠を戴ける尼僧が威儀正しく濶歩して腰下まで上半身を裸出せる有様、異形の顔をして踊れるセーナなどがある。

ポムペイの代表的壁畫と云へばこの「神秘の

家」の壁畫である。

迷路の家は閉鎖中にて觀覽を許されなかつた

新著紹介

○但馬郷土誌

藤本亮助著 菊版一三二一〇頁 兵庫

縣東河村尋常高等小學校發行 二月 非賣品

地質鑛物教育の熱心な主張者である著者藤本君は郷土教育の論議が高唱せられる時に當つて多年の抱負を具體さすべくこの著を公にして兵庫縣下の郷土教育に資せられた。自序に於て郷土の意義を「其の地方の小學校を中心として其附近に於て兒童が自由に往來することが出来直觀し得る所」と定め本文に於て先づ我が郷土の章を擧げて東河村と其隣町村とを記述してゐる。東河村は年々戸數の減少する傾のある村で、田畑も山林も其三分の一は他村の者の所有となつてゐる(本文には「他村に流れてゐる」と述べてある)。借金總額は約五十五萬圓で預金及び貸金約二十萬圓差引約三十五萬圓の負債があると村の眞狀を述べてと共冬に農閑期に灘へ酒造川稼に行き又女工となつて縣下に働くものが少くないのをほめてゐる。我が隣村としては往復數里から十數里の見學遠足に適した道に従つて自然人文を説いてゐる。第二章は準郷土地方と題して但馬全部の地理を主に主要河川の流域に従つて記述し、第三章は但馬郷土の總括として各郡につき總括し

て前の記述を確かした觀念に纏めさせようとしてゐる。第四章は郷土の地質篇で構造及び地震にまで及んで明解してゐる。附録には地震に關する意見を載せてある。全篇を通じて記述も議論も極めて解し易いから小學校用郷土誌としては好適のものであらう。たゞ豊岡附近の柵欄細工にしても其の販路がどう云ふ風であるかなどを記述しないから外界と郷土との關係が充分に判らないのは遺憾である。猶かなり誤植が多いのは學校用としては一つの缺點である。再版に當つて一層よきものが公にされることを衷心から希望する。(N)

○家藏地誌目錄續篇

高木利太著 菊版本文五九五頁

索引四〇頁 非賣品 昭和五年十二月

大阪毎日新聞社の専務取締役である高木利太氏は曩に彪大な家藏地誌目錄を著され約千九百部の日本の地誌を解題された(地球第九卷第一號八〇頁参照)其の後全力を盡されて蒐集された約六百部を逐一解題されたのが本書續篇である。著者は未だ傳寫し得ない讃岐地誌や壱岐續風土記のあることや市場に出たのを逸せられて嘆いては居られるが殆んど正綴二篇の地誌目錄によつて日本の古地誌は網羅されたと云つてよく地理學徒にとつてどんなに參考になるものか計り知られない當今陸續と發刊される新著に到つては爾後の蒐集は甚だ困難となるべく高木氏の様な眞摯にして有力な蒐集家を俟たなければ完全に保存することは困難なことと思へるが氏がかうした新刊書にも關心を有せられるのは誠に有難いことである。

○高等教育鑛物・地質學

吉井正敏著 菊版上卷 二

三八頁 昭和五年五月 定價二圓八〇錢 下卷

二三九—六五八頁 昭和五年十一月 定價三圓

五〇錢 東京東洋圖書株式會社

高等教育教科書又は參考書として鑛物學及び地質學の著書が近年續出し然かも新しいものが出るに従つて近代の學術進歩の結果を取り入れることが益多くなつてゆくのは學界の慶事である。鑛物學と地質學とを一緒にした著書は地學の全般に亘ることとなるので其の編述は容易でない。本書の著者第二高等學校教授吉井正敏氏は永く教鞭を執られた實際の經驗に即して鑛物地質學の全體をうまく按配されてゐる。即ち先づ天體及地球を序説し次に地殼の材料として結晶鑛物を述べ併せて岩石の一般を説いてゐる、下巻に入つて地殼の構成として先づ外力、引續いて水成岩の造成に及び、火山作用を説いた後直に火成岩の造成に入つて理論記述を盡くし、地殼の運動より變成岩の造成に説き及ぼし遂に應用地質鑛物學たる鑛

床を述べてゐる。最後の一篇は地球の歴史である。此の配列によると時に同種の項目が再出する様になる所もあるけれども初めは一般を説き後に詳説するといふ風で時間から云へば通讀には永くかゝる様であつても學習上には効果があることと思へる。内容を瞥見すると記述のスタイルは明確でおかしいなと思はれる所は甚しく稀であり且つ時に餘裕のある文體が出てくるので讀んで飽きることがない一氣に百頁や二百頁は通讀して了ふ程である。術語の横文字の誤植はかなり少ない、もう一度校正を經れば完全になることと思はれる。強いて缺點でもあらうかと思へる點を述べれば本書の編述には澤山の地質學書を参照されたことは明瞭であるがたゞ地文學をもつけ加へたといふにも係らず新しい地文學の書物を参照して居ない爲めに地文的の新事實がなかつたり又は地文的説明が輒近の知識に達してゐるとは見えない點である。これは地質學の著書には地文學の材料を輸入することがいつも遅れ勝であるといふ世界一般の通弊に従つてゐるといへる。兎も角本書は礦物學地質學として稀に見る好著であつて高等學校や専門學校やの生徒や文檢受験者には最良の手引となるものと信ぜられる。(S)

○人種地理學

(環境と人種) テーラー著 德重英助譯

古今書院 定價二圓三十錢

原著者はシカゴ大學教授で令名があり人種學に於ては世界的地質學的、地理學者に人類進化説をうちたてたので特に有

名であることは山崎博士が地理學評論で紹介されたところである(一九二七)著者は第二編に於て人種の進化と移住とに關し類例のない獨創論を立てたことを誇つてゐる。一九二一年以後六年間の勞作の結果だといふことであるが、これをよむといかにも目新しい事實と立論とに出あうであらう。但しその日本の人種に關する限りに於ては別に獨創とは考へられない南日本に居るといふネグリトが果して熊襲であつたか否や、日本の貴族は一部コーカサスであつたか、イラニヤンであつたか、さうしたこともまだ斷言が出来るわけのものではない。

テーラーの云ふアルピニヤマト種族といふ語が日本人に對して妥當であるや否や、さうしたことを考へるとテーラーの云ふことはまだ空想であるといつてもよいやうである、けれども何といつても世界に於ける人種の分布を手際よくまとめた點に於ては敬服に堪えないものがある、洞察の力が賦與されてゐるといつて過言ではないであらう。

譯者は知友新潟高等學校の德重理學士である。かつて新潟の砂丘海岸線について、世に問はれた篤學の君子である、年も若いし元氣な方である。従つて譯文も流暢で肩がこらない子はテーラー氏が有名な良譯者を得たことを満足するであらうと信じる、菊版二百五十六頁の美本で印刷も鮮明である、圖版も面白い、予はかうした比較的高等な地理書が世に流布せんことを望むの餘り、これを引受けた古今書院に對しても贅辭を呈したい。(藤田)

○郷土は如何に研究すべきか 歴史教育研究會 日

海書房發行 定價二圓八十錢

東京の刀江から郷土といふ雜誌がでゝゐる、さうした時勢をみてかうした書籍も世に出るやうになつた、柳田、鷲尾、沼田、芦田、後藤、中山等知名の大家の古蹟、建築、史蹟、紀念物といったものゝ採集や方法や批判等についての心得といふものが蒐集されてゐて、まづどういふ風にさうした史蹟を見るべきかを教へたものである。郷土研究家の名又は参考書目等を並べていかにも親切である。(M)

○印度旅行記

五十錢

天沼俊一著 奈良飛鳥園發行 定價六圓

著者天沼博士は建築美術の研究のため大正十一年十一月末から十二年三月迄印度の古蹟巡をせられた、歸來建築雜誌や印度美術寫真集として専門家に頌されたが、今度は之を一纏めにし旅行記と共に美術及建築の解説を兼ねてこの美本菊版七百二十七頁の大冊が出現した、紙も良いし、美はしい寫眞が満載されて坐して印度千古の大美術に接しうるの樂がある博士の文章は埃及紀行で既に定評がある、敢て予の提灯持ちをする必要を認めない、ブツキラボアのやうで、實は情味の多い行文である、東洋美術を研究する人の好資料であるばかりではない、地理を學ぶものも一應は本書の如きものを精讀せねばなるまい。特製は十二圓といふ、いかにも美本である並上製が六圓五十錢である、日本でこの本が幾冊られるであ

○日本地圖測量小史 高木菊三郎著 古今書院發行

定價一圓六十錢

らうか、興味はかうした本の賣行の上にあるのである(藤田) 測量部に多年奉職した高木氏は地圖の科學的研究に従事すること多年であり、いろ／＼材料も集めてゐられるので近く「日本地圖小史」といふのを出版しやうとしてゐられる、それに先つて本書が出て、我國の測量の創始時代から筆を起してあるが何分簡単に記述してあるから要領を得るには若干の苦心がゐると思はれる。しかしさうした古い尺度や制地の方法については他に著述もあることであるから、この位にとゞめたのであらう、多賀城碑については後世の偽作だといふ史論もあることであるが、著者にさうしたことの見解を尋ねるのは尋ねる方の誤である。著者は安土桃山時代の測量の基礎的内容については何ものべてゐないが、これ又後日の研究を望みたい、第二章に歐式測量交渉時代といふのをあげて築城測量、天正檢地、文祿圖等をのべてあるが、これもいづれ日本地圖史の方で解説されることであらう。但し慶長十七年長崎で月蝕觀測が行はれたことをはじめ、徳川以後の測量方法をのべてから後の章は、餘程詳細にのべてあるのがうれしい。第四期近世測量時代になつては、これは全く著者の境場である。筆者は之によつて大に學ぶことを得たことを感謝する。本書を見てあきたらぬことは、あまりに簡単に書きすぎてあること、歴史的發達の説話に乏しいこと、従つて各項目毎

にフツキラボーになつたために、讀みづらいといふ批難である。第二に史論のソースとしての原著を少しも出してゐないといふ不親切がある。これは再版の時にでも何といふ本にそれが書いてあるかを明にしなければならぬ、でないといふ學術的價値が少い。しかし何はともあれ我國最初のかうした試があるはれた、地圖に關して興味をもつ筆者はこの好著を得たことを我學界のために慶福すると同時に、何とかしても少し潤があつて後進が研究しうるやうに、其の本源の書目を明にしてほしいと共に、我國地理學史の上で、更らに大に書かねばならぬ人々のことを増補されることを著者に切望する、妄評多罪。(藤田)

○綜合歐羅巴地誌

佐藤弘著 共立社編 定價二圓五十錢

マハチエツクの綜合歐羅巴地誌の譯書である、歐洲の地形水系、動植物及歐洲の人類、經濟的狀勢といつたものゝ、總括である、菊版二五六頁。(下)

○信濃中部地質誌

本間不二男著 信濃教育會小縣上

田部會藏版 昭和六年二月二十八日發行 定價七圓五十錢 古今書院發賣

本書中に黒田徳米氏著化石貝類、今野圓藏氏著信濃中部に産する新生代化石植物群の二編が特殊研究として收められてある。菊版、本文二三一頁、特殊研究二〇九頁、別に附録として參考文獻目錄、難讀地名一覽表、索引を附し多數の挿圖

の他に美しい玻璃版の化石圖版、寫眞版の岩石圖數葉が加はり全體として印刷鮮明で氣持のよい本である。

信州は教育事業が我國に於て最進んだ所であり、國人の氣質の特長として好學の風の盛であるのはすでに有名である。此國の教育會が他に先じて己が郷土の地質研究をなしとげたのは宜なるかなである。まして本書のごときすばらしい大部冊を此不景氣に喘ぐ時世に敢然として出版を斷行した其意氣に於て我々はまざまざと信州人の特質を窺ふのである。教育會の地質調査事業は本間氏の此著述を以て終つたのではない。まだ此先にも長く繼續するであらう。研究調査の主動者は小山進氏であり、本間君の指導の下に活動した多數の會員諸氏の貢獻は隠れてゐるが大きなものでなければならぬ。

信濃中部は地質構造上の所謂大地溝(フォツサマガナ)の中央に位し本邦地學の焦點たる地區であるからその詳細なる地質調査は唯々信州人のみならず我々學徒の渴望する所であつた。本書は多數の頁、地質構造圖、斷面圖の他に前に記した様に六百頁の大冊で地方地質誌では眞に空前の文獻である。此の如き浩瀚なる業績を舉げた本間小山兩君に對して如何なる讃辭を呈してよいか、その措語のないのに苦しむ」とは小川琢治博士が本書の序に代へての言である。

本間小山兩君の觀察材料に基いて作製した等斜帶圖は既に帝國學士院に報告されたものだが數千箇處に及ぶ走向傾斜の測定を綜合したもので全く新案の構造表現法である。

黒田氏の貝類化石編は命名の嚴密なるに於て其比を見ず、氏にして始めて出來た事業である。其記載は主に命名規約に關する事項であるから専門的であつて一般讀者には難解であるかも知れないが我々には眞に貴重なる文獻となるものである。ただ惜むらくは各産地がどの地層に屬するかが明かにされてない事である。

今野氏の植物化石編は初學者にも解る様に懇切に説き出し氏の浩瀚なる學問上の見解を縦横に驅使したもので正しく本書中最良き部分である。地方的地質に全く興味なき學徒はないかもしれないがあつても今野氏の植物化石に關する一編を見逃す事が出來ないから此部分の爲にだけでも本書を求めゝるの要はある。

本間氏は本文を擔當するが初學者の便を慮り地質學一般に涉り著者獨特の解説法を以て筆を起してゐる。また岩石の研究は比較上無味のものであるが同様に原則から説いてあるから専門家ならずとも樂に讀める。本間君は自分から言明して岩石の研究は未だ完成しないと云はねばならぬ。しかし本書の性質としては可なり充分のものと言はねばならぬ。

本間君は地質現象に生理現象を比喩してゐるが此は特にフオッサマグナの研究に於て面白い思ひ附きである。此重要なフオッサマグナの研究はなほ一層奥に突き進まねばならず多くの子を産む事が在信州の同學の士の勉であらう。(横山)

○信濃中部地質圖

本間不二男、小山進調査 信濃教育

會小縣上田部會發行 定價六圓 古今書院發賣
十二萬分ノ一、別に斷面圖一葉を附す。信濃中部地質誌と併せ讀むべきもので切り離して發賣したのは使用者の便宜の爲であらう。鮮明なる印刷を推奨する。

報 雜

○米國の自動車

過去二十數年間に自動車が出現して米國國民生活に大なる影響を與へた。田舎と都會とを問はず外出には交通機關として用ひられ、郊外又は公園に出で、觀劇遊戯運動等と相並んで重要な娛樂機關となり道路の改良と共に長距離交通機關として汽船鐵道の位置を奪はんとし、現に一九二八年米國人のカナダ旅行者の使用した自動車數は三百六十五萬臺に達した、さうして鐵道及汽船によるものは多少減じてゆく、さうして自動車が増加したゆゑに、米國は莫大なゴムの消費國となり、その消費四十四萬噸中八割五分はタイヤ其他の材料となり、生産中のギヤソンの八割も亦之に費やされ、鐵は生産の一割八分、硝子板は七割四分、アルミニウムは二割七分、銅の一割五分を用ひ、裝飾用柔皮は六割硬木は一割九分、錫は二割六分いづれも自動車製造に用ひられる、かくて直接間接に自動車に關係する米人四百三十四萬人と稱し殆ど米國の經濟的革命を來した、その生産は國內需用を充たすのみでなく外國へ進出し一九二八年の輸出五